

## 51

## 新出の香川南洋の門人録について

永塚 憲治<sup>1)</sup>, 松岡 尚則<sup>1,2,3)</sup><sup>1)</sup> 公益財団法人研医会, <sup>2)</sup> 東邦大学医学部東洋医学研究室, <sup>3)</sup> 医療法人弘仁会 岡林病院

一本堂三代目の香川南洋(1714~1777)の門人録を京都の古書肆より見出したので、ここに報告したい。香川南洋は、香川修庵(1683~1755)より始まる一本堂の三代目で、修庵の実子である一本堂二代目の冬嶺(1731~1768)が早世したことにより、元々は大坂で儒医を営んでいたが、跡を継ぐことになった修庵の甥で、幼き時から修庵の元で養育され、儒を伊藤東涯(1670~1736)に、医を後藤良山(1659~1733)に学んだ人物で、墓所は京都嵯峨の二尊院に在る。

本門人録は、表紙に「〈一本堂/南洋先生〉門人録 写」とあることから、別に原本があり、そこから写されたものであることが分かる。年代は修庵が亡くなった年の宝暦五年(1755)の二月から南洋が亡くなる年の安永六年(1777)の六月までの23年間の記録で、南洋はこの年の八月十六日に亡くなるので、死の二ヶ月前まで門人を取っていたことが分かる。

その体例であるが、まず姓名が記され、その下に年齢、更にその下に出自(出身地や所属)が書かれ、次の行に入塾した日時が記されるのが一般的な書式である。記された門人の総数は、326名で、南洋の墓碑には門人400人と称している(「生徒着籍蓋四百人……」)が、それに近い数である。

まず、門人の分布であるが、北は松前から南は肥後まで全国に散らばっているが、近畿(約33%)、中部(約17%)、四国(約17%)が目立つ。多い順から上位三国をあげると、一位は近江(25人)、二位は阿波(22人)、三位は陸中(19人)となり、その多さの理由は不明であるが陸中の19人(実は陸中の人々はみな南部の出身で、陸奥の南部の人間を併せると25名になり、一位の近江と並ぶ)は目立つ。同じ地方の人間が同日に入門しているのが散見されるが、これは費用や道中の安全を考えれば、当然のことだと思われる。又、入門には、直接に入塾するのが一般的であったが、手紙による入門も見受けられた。

今度は、入門者数について述べてみたい。23年間の年平均14.17名で、最大値20名、最小値は7名となる。20名の年は、二回あるが、一回目は修庵の亡くなった年であり、門人録の始まりの年でもある宝暦五年(1755)で、その年の翌年に最小の7名となるのは、一本堂初代の修庵の名声の高さとその死亡によるためだと思われる。二回目の20名は、宝暦十二年(1762)で、その前後の入門者数も、宝暦十一年(1761)が17名、宝暦十三年(1763)が17名と多く、その頃には修庵の死から脱却して再び塾の経営が軌道に乗ったことが分かる。また一本堂を継いだ南洋の最盛期は、明和八年(1771)から安永三年(1774)の4年間だと考えられ、それぞれ18名、15名、19名、17名の入門者を記す。

次に、年齢構成について述べてみたい。年齢が記されているのは211名で、内3名が手紙による入門である。入門者の平均年齢は、24.28歳で、手紙による入門者を除いた平均年齢は、23.97歳であった。入門した最年少は13歳で、最高年齢は70歳である。しかし70歳の入門者は、手紙による入門者であるので、それを除外すると最高年齢は54歳となる。入門者で一番多かった年齢は20歳で27名、第二位は21歳で20名、第三位は19歳と24歳の19名であった。